



ニホンジカ高密度生息下における 広葉樹循環利用に向けて

森林総合研究所東北支所 高橋 裕史

森林資源の循環利用のため、そして水源涵養機能や砂防・治山を通して私たちの生活の安全を確保するためにも、森林は再生・更新されなければならない。ところが、実生か萌芽か苗木かといった更新の態様にかかわらず、ニホンジカによる食害が更新を阻む要因となっている。なお一層の効率化が求められている再生林に際して、これは重大な障害といえる。

林業において野生動物による食害は、遅くとも百数十年前までには認識され対策されていた。吉野林業全書（森 1898）の「杉檜植付立木の獣害予防」と題した一節は、その発行当時約四百年の吉野林業の歴史をふまえて「獣害のない地はなく」「必ず防除すべき」ことを指南している。「鹿は芽を食い又角で幹の皮を剥く」被害の対策として、「植付地」を「高さ六尺余の木柵（栗又は杉檜）」で囲うこと、「苗木」は「雑木の枝葉二三尺」で覆うこと、「立木の幹」は「雑草若しくは杉檜の枝葉を添えて」「檜皮で巻く」よう説いている。被害の状況も対策も現代と変わらず、違いは防除の資材、しかも単木保護と面的防除を併用し、現代よりも入念でさえある。動力機械のなかった当時、このような対策も含めた林業・森林利用はものすごい重労働であっただろう。一方、化石燃料に依存し始める燃料革命以前には、生活資源のかなりの部分を里山に頼っており、家畜を使役していた場合には、家畜のための飼料敷料も含んでいただろうし、放飼・放牧することもあっただろう。したがって、捕獲や防除柵の設置といった直接的な被害対策のほかに、膨大な労働力の入り込みと強度の資源利用は、野生動物にとって生態的な競争者としての機能や、追い払いの効果もあったのではないだろうか。

現代でも新植地や更新伐の後には防除柵の設置が進められている。しかし水や土砂の移動を制御するのが難しい急傾斜地、周囲からの落枝やときに倒木も生じる林地では、設置時の柵の機能を維持し続けることはやはり困難がともなう。維持管理に手が回りきらず、柵の裾の隙間や、落石や落枝などで破れた箇所から侵入されてしまうケースは残念ながら珍しくない。しかし、侵入はされても食害を軽減できる場合もあることは、柵内外で明らかに異なる植生から見て取れる（写真）。このような場所では、完璧に侵入を防ぎ続けるだけの柵機能を維持しようとするよりも、前述の単木保護と面的防除のような合わせ技によって、確実に低コストに更新を促す可能性が考えられる。

例えば、大阪府北部一帯の北摂地域に今も残る台仕立てしたクヌギ（薪炭林）は台場クヌギとよばれ、その目的の一つとして萌芽の食害防止の可能性が指摘されている（服部ら 2005）。このほか、薪炭林施業と、家畜とその飼料の生産を同所的に進めるヨーロッパのポラード（pollarding, Rackham 1986）や日本の混牧林（松本ら 1998）も、林業と畜産業それぞれの視点からすると必ずしも効率的ではないかもしれないが、被害をもたらすニホンジカ対策を含めて考えると、参考にすべき点があるかもしれない。

引用文献

服部保・南山典子・松村俊和. 2005. 猪名川上流域の池田炭と里山林の歴史. 植生学会誌 22: 41-51.

セミナーの参加者から

- 松本光朗・本田健二郎・黒木重郎. 1998. 九州阿蘇・九重地方におけるクスギ混牧林に関する研究. 森林総研研報 375: 1-59.
- 森庄一郎. 1898. 吉野林業全書. 大阪石版合資会社. 441pp(国立国会図書館デジタルコレクション、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/842441>)
- Rackham, O. 1986. The History of the Countryside: the Classic History of Britain's Landscape, Flora and Fauna. (邦訳: 奥敬一・伊東宏樹・佐久間大輔・篠沢健太・深町加津枝 (監訳). 2012. イギリスのカントリーサイド. 653pp. 昭和堂, 京都.)



写真1. ニホンジカに侵入されても下層の様子は柵内外（左が内）で異なる。



写真2. ニホンジカの届かない高さまで生長できた萌芽枝があれば更新が期待される。